研究

『佐伯の野球』昔語

賛助会員　山内武麒
（佐伯市山手区）

（一）

佐伯は大分県下で真先に野球を始めた処だと聞いている。佐伯は県下に於ける野球の発祥の地だと、佐伯市民は自負している。聞くところによると、明治三十四年頃から始まったというから、約七十年の歴史を持っているのである。

この野球史を記録しておくことは、佐伯の体育史を語る上に意義あることと思うが、詳細な記録を探し出すすべもない。佐伯小学校の創立六十年記念誌に、昔、同校に勤務された先生方の色々な憶い出話が載っているが、その中に野球に関するものが二三ある。それを抜すいし、私（筆者）の記憶をたよりに書き綴った小文を菅一郎先生に読んでいただいたら、先生の御記憶で色々と補足し教衍して下さった。時代に前後することもあろうし、書きおとしたこともあろうが、佐伯の野球の今昔について記してみよう。

（二）

佐伯小学校の沿革誌をひもとくと、「明治三十四年四月、此の頃より課外運動として野球を始めたり。」と記されてある。これはその当時三の丸にあった佐伯尋常小学校の記録で、三の丸の下、即ち今の佐伯小学校の校地の城山寄り約半分の敷地にあった佐伯高等小学校では、これより以前既に野球を始めていたらしい。高等小学校では学級対抗の野球試合などが行われていたので、尋常小学校の男の児たちもその感化を受けて、この頃から真似ごと程度のものをやり始めた。先生の中にも野球に心得ある人が居て、野球の指導を始めたことが沿革誌に記載されたのであろう。

阿南草先生の書き残された手記によると、佐伯の野球の創始は明治三十四年よりずっと前であったらしい。阿南先生は佐伯市民なら誰でも知っている佐伯市第二代の市長となさった方で、佐伯の野球の大先達であり、その啓蒙に心魂を傾け、野球王国佐伯の名を高めた人である。先生の書かれた「水産運動会の思い出」の中に、次のような文がある。

佐伯のスポーツというとすぐ野球を聯想しますが、野球すなわち四角ベースの佐伯に於ける始祖は、私の知る限りに於いては山名驥氏であります。その年代は明治二十六年で、当時の尋常四年生に、手製のスゲ鞠と杉の木で作ったバットを使ってベースボールの大体のカタを伝授したのです。その後、高等小学校では石坂鉄門氏が之を指導奨励し、一方上野村（現在の弥生町）にあった小学高等小学校では、校長の堀荒太氏が自校児童に之を植付け、爾来両校の対抗試合がしばしば行われることになったのであります。堀氏も石坂氏も後に佐伯の旧家の養子になって吉良、林と改姓したのであります。

しかし佐伯の少年子弟が近代野球の術を授かった

のは、明治四十年、当時早稲田大学の選手であった西尾宇一氏のコーチを受けた時からであります。それからずっと後佐伯中学校が出来てから、同校野球部の夏季練習に早大の捕手宮游吉裕、外野手河合若次、投手清水光長、外野手岡見吉博などの諸君が、年々次々と来伯してコーチしたので何時とはなしに純然たる早稲田系の野球町になってしまった観があるのであります。

（佐伯小学校創立六十年記念誌所載）

この憶い出話に出ている石坂（林と改題）鉄門先生（御健在で現在中川区水銀町に居住）は明治三十五、六年頃佐伯高等小学校の訓導をしておられたが、先生の手記に次のような文がある。

若き教育者としての私のやせ我慢の思い出は矢張り野球である。事の起りは学校の落成記念展覧会に隣郡四村町の高等小学校の生徒が修学旅行に来て、運動場を独占して野球をはじめ、我が教え子たちが軒下に小さくなって居るのを見て私の若い血は燃えたが、何一つ野球の用具とてない。当時我が郡、否県下で野球に覇を唱えて居たのは南郡上野村の小倉高等小学校であった。これも主都佐伯の権威に関する。勝たざるべからず。

私と私の愛持の川辺、勝田、古川、古田、八木、岡本、今泉などの諸君は、毎晩宿直室に集って野球道具の製作だ。ミットを作る・ベースを作る。マスクをこしらえる。胸当までこしらえる。バットは口クロ細工をする所に頼む。それからいよいよ練習を初めると、窓硝子をわる。フワウルの球が屋根の瓦をわって、そこにもここにも雨もりが出来る。時の校長吉村君からずいぶん小言を食ったものだ。熱心ほど恐ろしいものはない。郷里佐伯の野球が東九州に覇をとなえるそもそもの動機はここに芽ぐんだ。それから松舞台の阿南君や野村君がこれにヘビーをかけて大成したのである。

（佐伯小学校創立六十年記念誌所載）

野球の揺籃期に先輩達がどれくらい苦労を重ね、熱心にはぐくんできたか、想像に余りあるものがある。

憶い出話の中に出ている佐伯高等小学校と、上野村の小倉高等小学校との野球試合について、私に寄せられた菅一郎先生の憶い出を記そう。

明治三十六年と仮りに推察する。勝田治郎（筆者の実兄）兄が高等科四年の頃でしょう。

佐伯側、投手、古川桂一、捕手、勝田治郎。八木（ガラス屋）一塁か？　或は野村浅吉か？　外のメンバーは忘却。今泉満吉、川辺周一、植野（杉谷のポンプ屋など（敬称略）

小倉側、投手、吉川渉。他は知りません。

佐伯側　高妻弘道氏。小倉側、出納国満氏引率。高妻先生は少し頸鬚を伸ばしとる。出納先生は丈夫濃く余計蓄えている。

番匠川原で試合をする。川原は、今年の夏、店を出して川魚料理を食べさせた所か、鉄道のピーヤのある所か、記憶審ならず。

球審、塁審のことで甚だ揉めた。結局、佐伯が勝ったが、これは鮮かな勝ではなかった。アンパイヤーの依估ひいきで、この審判の揉めは相当ひどかった。西先生共に師範学校の新赴任ということもあったかとも思う。林（鉄門）先生が川原に来て居たかは忘れている。

ます。生徒乱暴して投石などあった。ということで書けば追憶でも、尋常科四年生の子供心乍ら快技でなかつた印象の方が残っています。

林先生の手記の中に「これも主都佐伯の権威に関する。勝たざる可からず」に触れますが、小倉高等小学校がこの試合の前か、県下で野球に霸を唱えて帰ったのを迎え打ったと云うことのようです。小倉が歴戦して県下の幾校かを廻って試合として勝って帰ったのですが、歴戦の学校名を知つとる人は、今は誰も居ないようです。古川則道氏や今山力吉校長氏達でしょうが、小野春雄先生が現存なら知つとると思います。

小倉の投手吉川渉氏は、今、切畑の祇園で医者をしとる吉川高蔵氏の父で夭折しました。探れば解るが、一寸今夜はよだきい。思いつきました。仲野武吉氏の妹の婿です。仲野武吉氏が小倉の歴戦の地名を知つとると思います。渉氏は堀校長から投手の猛訓練を受けて、右腕が痛むので切畑に帰る途中懐に手を入れて帰りよつたので、右腕が少し曲つたままで伸ばぬようになりました。それでも猛球でした。その頃この吉川氏も佐伯の古川氏もカーブを出していました。吉川渉氏は大分中学に入つたら一年生で他校試合の時は五年生の投手が下りて代らされて、実質的に一年から使われておりました。以来七年大中の投手をしていました。七年とは二年とびとびに怠けて落第したのです。しかし野球だけでなく天才的な秀すでした。落第の次の年は七番位で及第、但し一学期だけは三番か四番位をとつている。大中の後は長崎医専でも医専の投手で、野球の医専時代を作りました。

(三)

前述の記録でわかるように、佐伯の野球は小学校から始まつたのであるが、その当時の野球は所謂四角ベースで、小学校児童の遊戯の一つとして流行したもので、今の野球に比べたらお話にならない程ど幼稚なものであつたに違いない。その頃はミットは布きれを張り合せて手縫で作る。グローブはまだない。スポンヂの野球ボールがまだ出廻らない時分であつたから、小さくとも皮ボールを使つた。捕手はミットを使用したが、外の野手は全部素手で掴んだという。バットは勿論手製であつた。硬いボールを投げ、打つては素手で掴んだのだから、余程豪気な児童でなければ出来なかつたのではあるまいか。それが流行して我れ我れも競つてやつたというのだから驚く外はない。

本物のミットが佐伯に来たのは、明治三十七、八年頃のことであつた。それについて菅先生の憶い出は次のようである。

明治三十七年か八年に始めて毛利家が野球のミット四箇を買つた。皆革製で、キャッチャーミットが特大、三個は小型(グローブ型ではない)。これより少し前に小学校にはキャッチャーミットだけ皮製のがあつたように思われる。四箇揃うて佐伯に入つて来たのは初めてのようです。これは毛利の若様及び学友用のもので学校に寄贈してはいない。このミットが入る前の年頃、今の池塘の後の敷地を拡げて、石炭殻へゴヘイダ)を敷いてテニスコートを毛利家が作つた。毛利家にミットが到来してから一年経つたか経たぬうちに、小学校も逐次皮のミットになつた。捕手以外の各選手の小型ミットがグローブになつたのは、まだ一年か二年後

のようです。

私（筆者）どもが野球を覚えたのは、尋常科の三、四年の頃（明治四十二、三年頃）であったが、その頃には既にミットもグローブもあった。あったといっても現在のような立派なものではない。少年用には皮製でなく布製のものもあった。学校には備品として皮製のミットとグローブを一揃え揃えてあって、高学年の生徒が交替で使用していた。めったに触れることも出来ない大事なものであったから、布製のものを買ってもらって得意そうに学校へ持って来る子もいた。ボールは今使っている硬球と大差はなく、少し細目で堅い皮ボールであったが、打球が今のボールのように遠く飛ばなかった。皮ボールはその頃は貴重品のように大事にして、縫い目の糸が切れると早速細い緒糸で縫ったものだ。今の軟式野球に使用するゴム製のボールは大正の末期頃から使い初めたのであるから、この当時、尋常科の児童でも今の硬球と殆んど変らないこの皮ボールを使っていたのである。バットは既製品のものもあったが手製のものが多かった。一般に重く、重いバットでないと打球が遠く飛ばないと言われていた。捕手のかぶるマスクもあったが今のような型のものとは違い、針金を組合せて作ったものであった。それで番用な先生は手製のマスクを作っておられた。捕手がプロテクターと脛当をつけるようになったのは、ずっと後のことである。

（つづく）

（余白小話）

鶴屋城二の丸がどこか、知らん方がある。二の丸は山頂にある。三の丸の上の段（元稲荷社があったという）が、ちょっと広いところを二の丸と呼んでいるのを時々耳にする。とんでもないまちがいである。

研究

佐伯と国木田独歩（四）

「小春」より

会員　山本　保

「小春」は明治三十四年三月に発表した作品（独歩二十一才）です。丁度七年前、ワーズワースの詩想に導かれて自然を愛し、ひたすら自然の世界に没入した佐伯時代を回想し、思慕して描いた佳作です。作品の一部を左に掲げます。

自分が最も熱心にワーズワース（詩集）を読んだのは、豊後の佐伯にいた時分である。自分は、（鳴谷宗教師）として この所に一年滞在していた。

自分は今、ワイ河畔の詩（ワーズワース詩集）を読んで、端なく思い起すは実にこの一年の生活及び佐伯の風光である。（佐伯）の地において自分は教師というよりも寧ろ生徒であった。（イギリスの詩人）ワーズワースの詩想に導かれて、自然を学ぶところの生徒であった。自分の眼底には、かの地の山岳、河流、渓谷、緑野、森林悉く鮮明に残っていて、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放っている。なぜだろう！

「月光をして汝の逍遥を照らさしめ」、自分は夜となく、朝となく、山となく、野となく、ほとんど一年の歳月を逍遥に暮らした。「山谷の風さして恣に汝を吹（ほしいまま）